「日本霊異記」訓釈試論（一）

我妻多賀子

ここ何年か、私は、「日本霊異記」の訓釈索引を作成するために、ずっと研究をつづけて来た。その際、語義未詳の訓釈がいくつか出て来たので、以後、これらの語を解明すべく、いろいろな角度から調べて行ってみることにしたい。

(一)、ココロツゴク

まず第一に取り上げようとするのは、〃ココロツゴク〃という訓釈である。これは、興福寺本「日本霊異記」の上巻序に左のように出ている。

悸　志々呂津古支之

このまま訓めば、これは〃シシロツゴキシ〃となる。同じものが、高野本系統の国立国会図書館本では、

悸　ナムヽロツ古支口

となっている。こちらは〃ナムムロツコキ口〃と訓める。

ところで、狩谷棭斎はその著「日本霊異記攻證」の中で、この語について左のように注をつけている。

悸　去ヽロウ古支也　原作ナムヽロツ古支也　今依字ー鏡ー集　改　説文悸心ー動ー也

つまり棭斎は、「字鏡集」で〃悸〃の字を〃ココロウコク〃と訓んでいることから推して、〃ナムヽロツ古支口〃を〃去ヽロウ古支也〃と訓み改めているわけである。

それでは、この棭斎の改訓が可能かどうか検討を加えてみることにしよう。

まず〃ナム〃は、これを続けて書けば〃去〃となり得るので、〃去〃の誤字であるということは十分考えられ

る。

又〝ツ〟も、〝ウ〟とは字体が非常に似ているから、これまた〝ウ〟の誤写と考えることが可能である。

最後の〝也〟は原文を見ると、〝匿〟となっていて、〝也〟と訓むことも難しい。ただこれは、〝也〟でも〝之〟でも、本題とはそれ程重要な関係がないので、今一応〝口〟のまま保留しておくことにする。

要するに、国立国会図書館本で見る限り、掖斎が述べているように、〝悸〟を〝ココロウゴキ口〟と訓むことは出来るわけである。

ところが、ここで問題になるのが、冒頭に挙げた興福寺本の訓釈である。すなわち、興福寺本では、〝志々呂津古支之〟となっているが、これを、〝ココロウコキ口〟と訓めるであろうか。

まず初めの〝志〟については、これを〝去〟と書き誤ることが時にあるようである。例えば、「古事記」の歌謡に

葦原の志祁去岐小屋に菅畳いや清（さや）敷きて我が二人寝し　　記歌謡一九

とあるが、この|を引いた部分、諸本〝去〟に作り、〝シケコキ〟（意味的には、『醜（シコ）キを延べてシケコキといふ』という「古事記伝」の説がある。）と訓んでいる。

しかし、真福寺本を見ると、この〝去〟が〝志〟になっている。しかも、「古事記」の歌謡には、〝去〟の字を音仮名として使用した例は他に無いので、（注1）、この場合も、〝志〟に従い、〝シケシキ〟（荒れてきたないの意）と訓むべきだというのが、目下の通説である。

つまり、これは、〝去〟と〝志〟との誤写例の一つである。

更に、「日本霊異記」（興福寺本）の訓釈に左のようなものがある。

意　牟我去備　　上・縁第三

この部分、国立国会図書館本では、〝牟加之比〟と訓ぜられている。〝意〟は、〝憶〟、〝喜〟と同字で、好ましく願わしい意であるが、これと同じ意味を持つ〝むがし〟という形容詞が「万葉集」に使われている。

白玉の五百つ集ひを手に結び遣せむ海人は牟賀思久（むがしく）もあるか　　巻十八、四一〇五

又、「日本霊異記」の中にも

後生の賢者牟我之久（むがしく）も嗤フコト勿（な）かれ　　上・序

と出ている。このように、〝むがし〟という形容詞の存在が認められるので、〝むがしび〟というのは、この

〝むがし〟に、接尾語の〝び〟がついて出来たものと考えられる。

つまり、〝牟我去備〟の〝去〟は、〝志〟とするのが妥当であり、これまた、〝去〟と〝志〟の誤写例の一つとして挙げられる。

右に述べたように、〝志〟と〝去〟の誤写例はいくつか見られるので、この〝志々呂津古支之〟の〝志〟も、〝去〟の誤りと考えてよさそうである。

次に〝津〟であるが、これを〝ウ〟と訓むことは難しい。〝ウ〟の草体のうち〝津〟と間違えられるようなものがなく、原本では明らかに〝津〟となっているので、この場合は、〝津〟のまま保留しておくより外なさそうである。

最後の〝之〟は、草体で書くと、〝也〟と書き誤る可能性が大いにある。ただ、霊異記の訓釈には、助動詞の〝ナリ〟〝ツ〟〝ヌ〟や、助詞の〝テ〟〝ニ〟〝ノ〟〝ヲ〟など、その語尾までをつけて記すことが多いので、これもその一つと見て、過去の助動詞〝キ〟の連体形〝シ〟、もしくは、サ行変格活用動詞〝ス〟の連用形〝シ〟がついたものと考えられなくもない。しかし、この場合、原文を見ると、

慚愧する者は倏（たちまち）に悖（ココロツゴ）キ惕（いた）み起き避（さ）る頃（あひだ）を忿（いそ）ぐ。

上巻・序

となっていて、〝ココロツゴキシ〟と、〝シ〟を入れて考える余地がないので、〝之〟は〝也〟の誤写とした方がむしろよさそうである。

以上の結果、興福寺本では、〝悖〟を〝ココロツゴキ也〟と訓んでいることになる。それでは、この〝ココロツゴキ〟という耳慣れない言葉が果たして存在していたのであろうか。

上代の他の文献を眺めてみると、「万葉集」に〝ココロツゴキテ〟という語が使われている。

高御座　天の日嗣と　天皇（すめろき）の　神の命の　聞し食す　国のまほらに　山をしも　さはに多みと　百鳥の　来居て鳴く声　春されば　聞きの愛（かな）しも　いづれをか　別きてしのはむ　卯の花の咲く月立てば　めづらしく　鳴くほととぎす　菖蒲草（あやめぐさ）　珠貫（たまぬ）くまでに　書暮らし夜渡し聞けど　聞くごとに　許己呂都呉枳弖（ところつごきて）うち嘆き　あはれの鳥と　言はぬ時なし

巻十八、四〇八九

この部分、「校本万葉集」で見る限り、諸本〝ココロツゴキテ〟としている。又、「日本霊異記」の興福寺本

は、平安初期の資料としてそのまま扱い得る唯一の善本であるということから（注2）、〃ココロツゴク〃（終止形）という語の存在を認めてもよさそうである。

意味的に眺めてみても、「日本霊異記」の方は、

慚愧する者（心に恥ずかしく思うもの）は、急に胸がどきどきして痛む思いでいそいで立ち去る。

「万葉集」の方は、

……卯の花の咲く夏、四月になると、好もしく鳴くホトトギスはアヤメ草を薬玉に貫くまで、昼は日の暮れるまで、夜は一晩中聞えるけれど、その声は聞くごとに感興をもよおし、私は嘆息して、ああすばらしい鳥だと言わない時はない。

となり、どちらも、心の感動した状態を述べている点で一致する。

ところが、この〃ココロツゴク〃という語は、今述べた上代の二作品に見られるだけで以後は全く出て来ない。

ここで、視点を変えて、「日本霊異記」で〃ココロツゴキ（也）〃という訓がつけられている、漢字の〃悸〃について調べてみることにしよう。

〃悸〃は、説文に〃心動也〃とある外、ざっと眺めた古辞書類には、左のような訓がつけられている。

悸　イタム　ウレフ　心ツクシテ　心ハシリ　ウルヽク

類聚名義抄

悸　ムナサワギ　ヲノヽク

倭玉篇

悸　コヽロハシリ

色葉字類抄

悸　和奈々久又豆々志牟又加志古万留

新撰字鏡

悸　ワナヽク　ウルヽク　コヽロハシリ　ミタル

イタム　ツヽシム　コヽロヲクシテコマル　ウレフ

コヽロウコク

字鏡集

右に挙げた例でわかるように、〃悸〃を〃ココロツゴク〃と訓んだものはどこにも出て来ていない。又、椋斎が引用した〃ココロウゴク〃という訓も、わずかに「字鏡集」に見られるだけである。

大体、この「字鏡集」では、〃ココロウゴク〃という訓が、左に記すように〃悸〃以外にも非常に多く用いられている。

稔　コヽロウコク　コヽロックシテ　イタム　コヽロハシル

惰　コヽロウコク

惰　コヽロウコクナリ　ナマ〳〵シ

悛　ヲソル　コヽロカク　コヽロウコク

忱　コヽロウコク　ウコク　マコト

恍　コヽロウコク

序　ウレフ　イタム　心ツクシテ　コヽロハシリ　ウルヽ
ク　コヽロウコク

さて、〃悸〃はりっしんべんのついた字であるから、〃心〃を意味することは明らかで、右に引いた古辞書の中にも、〃コヽロツクシテ〃〃ココロハシリ〃〃ココロウゴク〃など語頭に〃ココロ〃がついたものが多い。

そして、この種の語はいずれも、〃ココロ〃という名詞に〃ツクス〃〃ハシル〃〃ウゴク〃などの動詞がついて複合動詞化したものと考えられる。

よって、〃ココロツゴク〃も、名詞〃ココロ〃に動詞〃ツゴク〃がついて出来たものであろう。

そこで、問題になるのが、〃ツゴク〃という動詞である。この〃ツゴク〃については、現在以下に記す四つの説が行なわれている。

その第一は、〃ツ〃を〃ウ〃の誤写と見て、動詞〃ツゴク〃の存在を否定するもので、これは真淵が「万葉考」の中で、巻十八・四〇八九の注につけたのが最初である。

今本豆呉枳と有は字の草を豆に見たるにて誤しるかれはあらたむ

以下、古義・全釈・略解などがこの説にしたがっている。しかしこれは、「日本霊異記」の興福寺本訓釈を知らなかったために生まれた説であるとしか考えられない。

なぜなら、〃宇〃と〃豆〃は草書で記すと書き誤ることがあるかもしれないが、「日本霊異記」の方は〃津〃で書かれていて、〃ウ〃の草体のいずれかと書き誤る可能性は、ほとんどないと言っていいからである。

二番目は、〃ツゴク〃を〃ウゴク〃と音韻交替したとする説で、契沖が「代匠記」の中で唱えている。

心つときては心うときてなり。宇と豆と同韻にて通せり。聞たひことにおとろく心なり。

これには、新考・私注などがしたがっている。しかし、〃ウ〃音と〃ツ〃音が交替するということはあり得るだろうか。これは、契沖など江戸時代の学者達の間で一般に考えられていた、五十音図の同行もしくは同列（段）の音はすべて相通するという誤った考えに基づいた説であると思われる。

念の為、「韻鏡」にあたってみれば

宇は模韻、内転第十二開合三等
豆は侯韻、内転第三十七開一等

で、それぞれ異なった韻に属している。したがって、〃宇〃と〃豆〃は同韻ではなく、〃ウ〃音と〃ツ〃音の相通ということもまずあり得ない。

第三は〃ココロツゴク〃という語があったとするもので、これを一語として捉えているのかどうかさだかでは

ないが、いずれにしろこの〝ココロツゴク〟を認めている以上、〝ツゴク〟という動詞の存在を否定はしていないと思われる説である。これは、注釈・全註釈・古典大系などの現行の万葉注釈書の大部分が支持している外、辞書類（大日本国語辞典・時代別国語大辞典上代篇・日本国語大辞典・岩波古語辞典など）もすべてしたがっている。

しかし、果たして動詞〝ツゴク〟は存在していたのであろうか。今仮に、「万葉集」の一字一音書きの例で、〝ココロ〟がついて複合動詞化した語を見ると、〝ココロオモフ〟〝ココロススム〟〝ココロックス〟〝ココロナグ〟〝ココロヘダツ〟〝ココロマドフ〟〝ココロヤル〟などがある。そして、これら〝ココロ〟の下の動詞は、すべてそれだけでも使用頻度が高く、又広範囲に用いられているものばかりである。

よって、〝ツゴク〟も当然多く用いられていていい筈であるが、使用例は全くない。

又、言葉はたった一語のみで存在することが稀で、似通った言いまわしの仲間と共にある場合が多い。

例えば、〝ウゴク〟で言えば、〝ウゴメク〟〝ウゴナハレル〟などが、〝ウゴ〟という擬態語を共通の語根に持ち、互いに仲間ということが言える。

そこで、〝ツゴク〟の仲間を捜してみると、まず語根〝ツゴ〟のついた言葉は、他に例が全然ない。又、音韻の面から見て、〝ツ〟は〝ス〟と交替することがあるので（ex消ツ―消ス）、〝スゴク〟という語が考えられるが、実際にはその存在はまず考えられない。更に〝ツギ〟〝ツグ〟〝ツグノフ〟なども、仲間として考えることが出来るが、ただ、これらは〝継ぐ・次ぐ・嗣ぐ〟〝告ぐ〟〝償のふ〟の意で、いずれも〝ツゴク〟とは、意味的に関連が認められない。

以上、動詞〝ツゴク〟の存在が不確かであるから、〝ココロツゴク〟という複合語があったとするのも、簡単には認められないような気がする。

最後に、〝ココロウゴク〟という慣用句において、母音連続をさけて〔t〕音を挿入したのではないかという説が、「時代別国語大辞典上代篇」に疑問の形で提出されている。

奈良時代、連続した母音が現われた場合に、①一方の母音が脱落する②母音が二つ合わさって新しい母音を作る③二つの母音の間に子音をはさむという三つの方法のいずれかで母音連続をさけていたのは、周知の事実である。

そして、〝ココロツゴク〟の場合は、この③に当てはめ

まるのではないかという説である。

だが、この③は、①②に比べて起こり得る可能性が非常に少なく、現在わかっているものでも、左に記すように、用例数が極めて乏しい。

Farusame　（春　雨）
kosame　（小　雨）
murasame　（村　雨）
Hisame　（氷　雨）
umasine　（味　稲）

右の例でわかるように、アメ（雨）のつくものがほとんどで、これらは母音重複をさけるというよりも、むしろ一種の慣用語のようにして使われているのではないかと思われる。

又、最後のウマシネも、ウマシ＋イネの縮約とみることが出来、かえってその方が穏当な考えのようである。

つまり、母音の間に子音がはさまって重複がさけられているという現象は、ほんのわずか、しかも限定された範囲内でしか現われていないものなので、〝ココロッゴク〟の場合も、ただちにこの特例の中に含めて考えることは一寸ためらわれる。

それに、〝ココロ〟のついて出来た複合語として〝ココロウ〟〝ココロウシ〟〝ココロウツクシ〟〝ココロウツリ〟などウ音で始まる語の連続したものがいくつかあり、それらはいずれもⓤ音を中に挿入せずに存在していることを考え合わせると、この説も余り賛成出来るものとは言えない。

以上、四つの説それぞれ難点があり、首肯しがたいものばかりである。

それでは、〝ココロッゴク〟という語は一体何であろうか。この訓がつけられた漢字〝悸〟は、先に挙げた古辞書の訓みから推して、心の動く状態を言ったことは明らかで、現在でも〝動悸がする〟と言った場合にこの字を用いている。〝心が動く〟という言いまわしは、今、話しことばとしては余り耳にしない。しかし、文章語としては時々使われ、過去の文学作品の中にも、左に記すようにいくつか見えている。

たとへば絵にかける女をみて、いたづらに心を動かすがごとし　古今集・序

タヒ〳〵スクサス物ウシトテモ心ヲウコカス事ナシ　方丈記

……心うちにうごきことほかにあらはれずといふことなし　新古今集・序

心モ動キ魂モ迷ヒヌ　今昔物語・巻五

わかき時は血気うちにあまり、心物にうごきて情欲

おほし　　従然草・百七十二段

更に、〃心動く〃という複合動詞の用法になると、用例数はだいぶ減少するが、それでも皆無というわけではない。

いかならんさまもわれくるしう心動くべうもおぼさねど……　　浜松中納言物語・巻三

……何の心動くべきふしはなけれど……　　同・巻四

身振ヒ心動テ更ニ馮ム所无シ　　今昔物語・巻十二

つまり、〃ココロガウゴク〃〃ココロウゴク〃という語は、その存在が明らかなのである。興福寺本「日本霊異記」と万葉集巻十八に、明らかな書写例があるとは言え、たったこの二例だけで、〃ココロツゴク〃という語が存在していたとするのは、一寸早まった考えであるように思う。やはりこの語は、〃ココロウゴク〃の誤写又は音韻変化の面から考えて行くのがいいのではないだろうか。

今回は調べるまでに及ばなかったが、訓点資料などに当たれば、何かヒントになるものが得られるかもしれない。

いずれにしろ、いろいろと考察を加えては来たが、〃ココロツゴク〃は、きわめてその存在が疑わしい語であるという、うやむやな結論しか得られなかった。

この拙稿に目を通して下さった多くの方々からよりよきご教示を戴けることを期待して筆をおくことにしたい。

注1、大系本「古事記」倉野憲司校注、一六四頁頭注参照。

注2、「本邦辞書史論叢」所収「諸本を通してみたる日本霊異記の訓釈について」小泉道、九七二頁参照。